

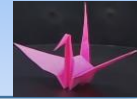
2021年
令和3年9月号

さやまだい

公民館・地区センターだより



平和への祈り朗読会



8月7日（土）14時～16時に狭山台公民館ホールにて、第2次世界大戦中に体験した民間人の想いを表現した『平和への祈り朗読会』が、多数の参加希望者の中で、先着順の30名が参加し開催されました。▼皆さん最後まで熱心に耳を傾けていました。

1. 牧港篤三 作「詩集・沖縄の悲哭」より（朗読：前原弘道さん）▼最初に「さとうきび畑」を歌われた後、感情の籠った篤い朗読が始まりました▼日本軍守備隊が壊滅するまでに、沖縄住民がこの戦争において、いかに苦しんだか、また戦争がもたらしたものは何であったかを、ありのままに訴えた朗読内容でした【老幼男女の住民が、右往左往して洞窟に逃げ込んだものの殺傷されたり、断崖から投身したりするなど、悲惨な光景を思い知らされゾッとしました】



前原弘道さん



北川洋子さん

2. 津村節子 作「星祭りの町」より（朗読：北川洋子さん）▼津村節子さんは、昭和20年前後、母の実家である入間川町（現在の狭山市）に疎開していました。「星祭りの町」はその時のことが書かれている小説で、戦後初となる入間川七夕祭りの賑やかな様子や入間川商店街の賑わいが蘇る様子なども描かれています。今年4月に狭山市の八幡神社に、その中の一節を刻んだ石碑が建立されました【七夕祭りで賑わった入間川商店街ですが、現在は徐々にシャッター街になりつつあります。一日も早く新型コロナが収束し、七夕祭りの復活を望みたくになりました】

3. 山川方夫 作「夏の葬列」より（朗読：林直子さん）▼小学生の時に疎開していた少年が艦載機の銃撃の中、彼を守ろうとした白い服の少女、ヒロ子さんと一緒にいると狙われてしまうとの理由で突き飛ばしました。ヒロ子さんの生死は不明のまま、罪の意識に苛まれながら彼は成長しますが、過去の痛みと決別するために疎開地だった町に戻ってきます。目的はヒロ子さんが生きているか？ 確認したかったからです。機銃で撃たれなくなったヒロ子さん。娘を亡くして気が違ってしまったお母さん。現実を受け入れられず逃避した彼。彼の時間はヒロ子さんの死を受け入れた事でやっと動き出しました。【私が子供の頃、戦争の危機回避で疎開してきた方々が、食料買い出しに来ると聞いた事がありました。疎開児童の山川さんの苦しみ内容と、心の解放感を良く理解出来ました】

4. 窪島誠一郎 作「無言館感想文ノートより 安典さんへ」（朗読：北川洋子／林直子さん）▼「無言館」は志半ばで戦死した画学生の遺作を展示する美術館で「無言館」の出入りに置かれているのが「感想文ノート」です。日高安典さんは東京美術学校（現・東京藝大）に在学中、裸婦像の絵を遺しています。モデルの女性に「生きて帰ったら必ずこの続きを描くから」と言い残して昭和19年夏、満州に出征して行きました。「安典さんへ」は、このモデルだった女性が、結婚もしないまま50年経ってこの絵を見に「無言館」を訪れ、その思いを綴ったものです。【恋しかった彼、大学生の出征。彼を想いながら結婚することなく歳を重ねた裸婦像の彼女。激動の時代、一途な想いを抱え生きた彼女に驚きを隠せませんでした】



林直子さん

※【 】は村上記者の感想

おいせ 屋根修理を勧めてくる訪問業者に注意！（消費者ホット情報/市消費生活センター）

消費生活相談員が実際に受けた相談例を紹介。困ったときは消費生活センターへ。

相談・問合せ ☎ 04-2954-7799（平日9時30分～16時）※12時～13時を除く

相談例はコチラ▶

